

「温故知新」

学校法人昌平黌 理事長
儒学文化研究所 所 長
田 久 孝 翁

「温故知新」

古きを尋ね新しきを知ることは世の常、人の道の原理原則であるにも係わらず、とにかく人間には「古傷」に係わりたくないと言う側面もあって、過去を振り向こうとしない風潮が定着する昨今であります。例えば戦争の歴史等を含め、日本人の歴史感覚の喪失などという問題が世上取り沙汰されていること等々を総括して、いま問われて居ることが「温故知新」の精神ではないだろうか。

近世に於ける教育現場の二、三の例を上げるならば、一、学級破壊とはすでに学校の崩壊を意味していること。二、青少年の凶悪犯罪の低年化は家族制度の崩壊を意味するものである。三、いじめや登校拒否等々、枚挙に及ばないのが現代社会の実情であります。

戦後五十年日本の経済高度成長を続ける中で、是れを支えて来たものは当時敗戦と言う国辱の中から這い上がるようにして歴史と共に生き残りを掛けてきた。要は日本民族の忍耐と努力によって築き上げられたのが昭和五十年代の経済大国であると言って過言ではない。

然しながら一方では自由と権利を基調とする民主主義世代が横行する中で、核家族主義が蔓延し、自由の原則を見失う責任と義務観念を忘却した結果として経済的バブルが弾け、金融パニック等の社会的大混乱を招き、正に平成恐慌の到来であります。加えて時代は少子、高齢化というアンバランスな背景となる。

戦後五十年の夢は、否な、付けはこの様な形で回って来たというべきであります。曾て本学の名誉学長山岡荘八先生は昭和三十年～四十年代の大学騒動を見て、今に日本は駄目になるぞ、この騒動の後に来る時代が恐ろしいと言われていた。それが戦後三世代を経過する中で、歴史も戦争も怖いものの知らない世代が遂にやって来たというのが今日の実感であります。

「心の教育とは何か」即ち失われた心を取り戻そうと言うものであって、言い換えれば現代の子供にはすでに心は失われているものと解されます。極言すれば生きる目的を失った人間像「喜怒哀楽の情」等、正に現代社会の教育には人間としての情感等が欠落した状態が続いているという他はない。だとするならば現代の子供達こそ被害者であると言うべきであります。

私はつい三ヶ月程前中国各地、六大都市五大学との友好親善の旅を続けて来ましたが、その中で経験した一つの例を上げて見ると、人口二百三十万という撫順市（いわき市姉妹都市）では、去る三月五日早朝二十センチ程の積雪に見舞われたその朝、街頭に出て驚いたことは何百か何千人か数え切れない程の中・高生の出役であります。道路の両側に並んで一斉に雪掃きをする姿でありました。この光景を単に社会主義国家であるからそれが出来ると言うように割り切ってはならないことを痛感せざるを得なかった。即ち「是れ教育」であります。社会に対する奉仕の精神、心の教育は一個の人間が果たす役割、責任と義務観念とを身体で覚えることであります。その体験はやがて心に深く刻まれて初めて人間形成の実が現れるというものであります。

本覺建学以来の精神もそこにあるのであって、そのような意味で本学としては来春四月開学を目指し、中・高一貫教育の実現に向かって目下鋭意準備を進めている処であります。就いては建学の精神に従って人間形成「指導教育」の実践的成果を上げることが目的として現在行われている。この論語素読教室の在り方を改め、更に「昌平覺精神」の具現化を図る上で今後は発展的立場に立って「儒学文化研究所」として法人上で今後は発展的立場に麾下の基幹施設とすることをここにご紹介申し上げましてご挨拶と致します。